『鬼谷子』における「気」の世界

久富木成大

はじめに
一　「捭闔」について
二　「反応」について
三　「揣」について
四　気と聖人の「力」
おわりに
注

はじめに

『鬼谷子』が正史の編集者達によって、その正史の一部分を成すところの書籍目録に初めて著録されたのは、『隋書』の経籍志においてであった。その後は『旧唐書』経籍志、『新唐書』芸文志へと続けて著録されている。こうしてみると、時代的には七世紀の唐代以後、『鬼谷子』は正史にとり上げられるようになったことがわかる。したがって、一世紀、後漢の班固が『漢書』を編纂したときには、まだその芸文志には収められなかったのである。

『隋書』経籍志の注には、鬼谷子を、周の世に鬼谷にかくれ住んだ隠者であるという。そうして、『旧唐書』経籍志の注では、蘇秦がその鬼谷子の著作に注解を加えたのであるといっている。しかも、これら正史は、『鬼谷子』が、いずれも戦国期の縦横家の著作であるとして、分類しているのである。こうして、その作者や加注者の固有名詞が特定されたにもかかわらず、その書が、先秦以来の古書を相当程度にまで網羅しているとされている『漢書』芸文志に、著録されていないこともあって、『鬼谷子』は後世の偽書であるとする見方も、一方に根強くある。

作者および製作年代については、前記のごとく定説は、『鬼谷子』については無い。しかしながら、この書の内容、つまり目録学上の位置づけについては、縦横家としての立場が中心におかれ、それに道家的なものの影響もつよいと見られているようである。小稿では、その立論の「気」に言及するところの多いことに着目し、そこに光をあてることによって、この書の思想史的な位置というものに、新たな意味づけを試みてみたいと思う。

一　「捭闔」について

『鬼谷子』は、捭闔ということを説くことから始められている。この捭闔とは、いかなることであろうか。

○捭闔は天地の道なり。捭闔は以て陰陽を變動し、四時に開閉す。以て萬物を化し、縦横、反出反覆反捭し、必ず此に由る。（捭闔者天地之道、捭闔者、以變動陰陽四時開閉、以化萬物、縦横、反出反覆反捭、必由此矣＝『鬼谷子』　捭闔第一）

また、つぎのようにもいう。

○捭闔は道の大化、説の變なり。必ず豫めその變化を審にす。口は心の門戸なり。心は神の主なり。志意、喜欲、思慮、智謀、これ皆門戸より出入するなり。故に之を關するに捭闔を以てし、之を制するに出入を以てす。之を捭すとは、開なり、言なり、陽なり。之を闔すとは、閉なり、默なり、陰なり。（捭闔者、道之大化、説之變也、必豫審其變化、口者心之門戸也、心者神之主也、志意喜欲思慮智謀、此皆由門戸出入、故關之以捭闔、制之以出入、捭之者、開也言也陽也、闔之者、閉也默也陰也＝『鬼谷子』　捭闔第一）

捭闔はここにいうところによると、天地万物の生成と深くかかわる現象であるということができる。したがって、その生成されるものは右の引用文にも明らかなように、その大を極める面からすれば天地、極小なる点に注目するならば陰陽の両気ということになる。いずれにしても、それらの〝物〟が生成し、存在するということが、捭闔ということと深くかかわっているというのである。しかもまた、それは、存在として固定されたところの物にのみ限定されてかかわっているのではない。形をとらない、陰陽の気のような、または、形のない諸々の現象というようなレベルについても、同様であるのである。このことは、右に引いた文章では、「説」、つまり、言葉とその生ずる前の心情等についてもいえるのである。そうした、存在や現象と、捭闔ということとの関係を、最もわかりやすくしかも感覚的に例示しているのが、右の文章でいうところの、心――口――言のあり方である。その「言」は、現象的には右の文にいうように、一個人の心が、志意、喜欲、思慮、智謀などと表現されているように、千変万化の状況として、さまざまに現象するのである。しかしそれらは一個人からいえば、一つの口の開閉によって生じ、ないしは生じないようにされるものなのである。このように、捭闔と、それにかかわる存在や現象は、一つの方向性をとる単純なものではない。そのことは、以下のような表現によってもわかるであろう。

○捭とは、或は捭して之を出だし、或は捭して之を納る。闔するとは、或は闔して之を取り、或は闔して之を去る。（捭者、或捭而出之、或捭而納、闔者、或闔而取之、或闔而去之＝『鬼谷子』　捭闔第一）

「捭闔」というある場所を、存在および現象が、ここにいうように出納取去するというのである。つまり、出入という相反する方向性を、この捭闔という場所では、それにかかわるものは取り行うのである。しかし、なぜそうした動きが可能となるのであろうか。この方向性、あるいは動きの本質的な側面について、存在の微視的な

とらえ方によって、『鬼谷子』に以下のような記述がなされていることに注目しなければならない。

○捭闔の道は陰陽を以て之を試みる。故に陽と與に言ふ者は崇高に依り、陰と與に言ふ者は卑小に依り、下を以て小を求め、高きを以て大を求む。此に由りて之を言へば、出でざるところなく、入らざるところなく、可ならざるところなく、陰陽の理盡き、小大の情、得らる。故に出入皆可なり。何ぞ不可なる所あらんや。(捭闔之道、以陰陽試之、故與陽言者依崇高、與陰言者依卑小、以下求小、以高求大、由此言之、無所不出、無所不入、無所不可、陰陽之理盡、小大之情得、故出入皆可、何所不可乎＝『鬼谷子』　捭闔第一)

「出入皆可なり」と、ここにいうが、その理由は「陰陽の理」を尽しているからであるということに外ならない。いうまでもなくその「出入」は、「捭闔」を出入することをいうのである。では、そうした「陰陽の理」とは、いかなることをいうのであろうか。

○小を爲せば内なく、大を爲せば外なし。益損、去就、倍反、皆陰陽を以て其事を御す。(爲小無内、爲大無外、益損、去就、倍反、皆以陰陽御其事＝『鬼谷子』　捭闔第一)

ここではまず、「小をなせば内なく、大を為せば外なし」と書きはじめられている。旧注①によりながら、これを敷衍すると、以下のごとくなる。陰にしたがえば限りなく小さくなり、どんなところへも入りこめる。陽にしたがえば限りなく大きくなり、外へ外へと拡大し、いかなる大きな部分をも占めることができる、と。現象および存在の大なる部分、あるいは目立つところを陽気の支配するところとする。微少で目につきにくい部分については、それを陰気のなすところと考えるのである。陰陽二気の活動によってあらわれる現象や存在のあり方は、このように気の活動によって、その姿が限定される。陽気と陰気とは、その作用は右に引用した『鬼谷子』の文章では、益――損、去――就、倍――反のごとく相反するものとしてとらえられている。しかし、これらは現実の作用を極度に類型化しているのであり、実際にはこれらの要素が入り交り、千変万化の相のなかにあるのである。そうした陰陽二気のさまざまな変化に応じて生ずるところの、諸現象や存在を、『鬼谷子』は以下のごとくのべている。

○陰陽それ和し、終始それ義あり。故に長生、安樂、富貴、尊榮、顯名、愛好、財利、得意、喜欲を言ひて陽となし、始と曰ふ。故に死亡、憂患、貧賤、苦辱、棄損、亡利、失意、有害、刑戮、誅罰を言ひて陰となし、終と曰ふ。(陰陽其和、終始其義、故言長生、安樂、富貴、尊榮、顯名、愛好、財利、得意、喜欲爲陽、曰始、故言死亡、憂患、貧賤、苦辱、棄損、亡利、失意、有害、刑戮、誅罰爲陰、曰終＝『鬼谷子』　捭闔第一)

長生以下、喜欲は、いわば陽気主導によって生ずるものであるといい、死亡より誅罰までを陰気主導によるものであると、ここではみなしている。こうしてみると、好ましいものを陽に属させ、忌み嫌われるものを陰に属させるのである。では、現象、存在としてのこれらの物事が、永久に固定したものとして考えられていたのであろうか。

○陽は動きて行き、陰は止まりて藏め、陽は動きて出で、陰は隨

ひて入り、陽は還りて始を終へ、陰は極りて陽に反る。陽を以て動くものは、徳、相生ずるなり。陰を以て静かなるものは、形、相成すなり。陽を以て陰を求むるは、苞むに徳を以てするなり。陰を以て陽に結ぶは、施すに力を以てするなり。陰陽相求むるは、捭闔に由るなり。此れ天地陰陽の道にして、人に説くの法なり。萬事の先たり。これを圓方の門戸と謂ふ。（陽動而行、陰止而藏、陽動而出、陰隨而入、陽還終始、陰極而反陽、以陽動者、徳相生也、以陰静者、形相成也、以陽求陰、苞以徳也、以陰結陽、施以力也、陰陽相求由捭闔也、此天地陰陽之道、而説人之法也、爲萬事之先、是謂圓方之門戸＝『鬼谷子』　捭闔第一）

「陽は動きて行き、陰は止りて蔵め、陽は動きて出で、陰は随いて入る」と、ここにいっている。ここでもまた動止行蔵、動随出入と、いずれも相反[2]する運動を、陽と陰とに認めている。また、「陽は還って始を終へ、陰は極まりて陽に反（かへ）る」という。これらは、いずれも陰陽二気の、よく知られている性質[3]をふまえている。したがって、『鬼谷子』ののべる、存在物や現象の推移ないしは変動も、この二気の性質に依拠していることは否定しえない。だがそれのみにはとどまらないのである。そこには、そうした存在物や現象をめぐる人間のあり方が問題となってくる。右の引用文では、「陽を以て動くものは徳、相生ずるなり」と、まずいう。「徳」とされるような高い行為によってこそ、陽の気に属するような、前述のごとき良好な現象や存在が、その人物によりそって生ずるのであるということになるのであろう。問題は、陰の場合に、それを自覚的に、人為的に、可能なかぎり速やかに陽に転ずることである。『鬼谷子』の書ではこのことについて、「陰を以て陽に結ぶは、施すに力を以てするなり」と明言する。ここで我々は、前述の陰に属する存在や現象の数々を想起したい。それらは死亡、憂患、貧賤、苦辱、棄損、亡利、失意、有害、刑戮、誅罰であった。したがって、『鬼谷子』のことばによると、こうした不幸を転じて福になしうるのであるということになる。そして、その転換のエネルギーを、「鬼谷子」は「力」だと表現するのである。この「力」が何であり、どのようにして得られるのかということは章を改めて見ていくことにし、ここでは、ここに引いた『鬼谷子』の、「陰陽相求むるは捭闔に由るなり」という表現に注目したい。

万物は変化流動するものであるということを、『鬼谷子』では前提としている。善悪や幸不幸というようなものも、そのなかに入るとみていたことは論をまたない。さきに引いた『鬼谷子』の文章では、善や幸福を陽気にむすびつけ、悪や不幸の源を陰気にあてて考えていた。その要点をここに再録してみよう。

○陰陽それ和し、終始それ義あり。……諸言、陽に法るの類は、皆、始といふ。善以てその事を始むるを言ふ。諸言、陰に法るの類は、皆、終と言ふ。悪以てその謀を終るを言ふ。（陰陽其和、終始其義、……諸言法陽之類、皆曰始、言善以始其事、諸言法陰之類、皆曰終、言悪以終其謀＝『鬼谷子』　捭闔第一）

この文章を、さきに『鬼谷子』から引用した「陰陽相求むるは捭闔に由る」、ということばと関連させて、その意味をとらえてみる。陰陽の気をはじめとし、万物や諸現象が、ここにいう終始、つまり

流動変化するとき、そこに何かが作用するという。その「何か」を、ここで『鬼谷子』は捭闔の名で呼んでいるのである。ここにいうように、この捭闔は、それがある種の作用でもあるとするところに着目すれば、それは「力」であるともいうことができるであろう。この章の冒頭に引いた文章では、「捭闔は天地の道」であるといった。また、「捭闔は道の大化」であるともいっていた。存在や現象を、陰陽の気に関連させながらも、その流動に独自性、自律性を、『鬼谷子』の書では認めることなく、「天地の道」といって、その場所、ないしは方向づけをおこない、あるいは又、「道の大化」と述べて、一種の力をそれに作用させている。このように、「捭闔」という「場所」ないしは「方向性」、あるいは一種の「力」を、決定的なものとして、位置せしめているのである。人事の推移変動にかかわる、前述のあの「徳」も、この「捭闔」に由来し、直結するものであったと考えてよいであろう。

二　「反応」について

『鬼谷子』の書は、前述の捭闔ということにつづいて、「反応」ということを問題にする。

○古の大いに化するものは乃ち無形と倶に生じ、反して以て往を観、覆して以て今を験し、反して以て古を知り、覆して以て今を知り、反して以て彼を知り、覆して以て己を知り、動静虚実の理、來今に合はざれば、古に反して之を求む。事、反して覆を得るものあるは聖人の意なり。察せざるべからず。（古之大化者、乃與無形倶生、反以観往、覆以験今、反以知古、覆以知今、反以知彼、覆以知己、動静虚實之理、不合來今、反古而求之、事有反而得覆者、聖人意也、不可不察＝『鬼谷子』　反應第二）

「大いに化する」、つまりこれは大いなる「力」を発揮することに外ならない。その「力」によって、存在や現象に変化を与えるのであり、そうした人物たちが、そのために得ようとするのは、右の文章では、文脈上、「動静虚実の理」ということである。そこで、まずここではこのなかの「動静」ということに注目したい。この「動静」ということが、大いなる「力」の発出に、大きく与っているからである。この動静ということについて、前引の文章は、以下のごとくつづく。

○人の言ふは動なり。己の默するは静なり。其の言によりて其の辭を聽く。（人言者動也、己默者静也、因其言聽其辭＝『鬼谷子』反應第二）

「人の言ふは動なり。己の默するは静なり」、という。これは多くの存在や現象のなかから、例として人の「言」と「默」とをあげて示したのである。「古の大いに化する者」は、この「言」と「默」とに依拠するところがあるというわけであるが、彼らは、これをどのように利用するのであろうか。それは、実は右に引いた文章が明らかにしてくれているのである。つまり、「一人の言ふは動なり。己の默するは静なり。その言によりてその辞を聽く」というところが、それである。ここを旧注では「静を以て動を観れば、則ち見るところ審かなり。言によりて辞を見れば則ち得るところ明かなり」[4]と解している。これは結局のところ、自分は静默にしていて、人の言葉

をよく聴けば、その人の発した言葉の意味だけでなく、その奥深くにあって、言葉にあらわれなかったその人の真意、ないしは意図が明らかになるということである。ここでは、そうしたことの手がかりとなるものを「辞」とよんでいる。その間の事情を、具体的に、以下のように『鬼谷子』では、更に展開していう。

○言の合はざるものあれば、反して之を求むるに、その應、必らず出づ。（言有不合者、反而求之、其應必出＝『鬼谷子』　反應第二）

これはしかし、どういう意味に解すべきであろうか。我々はまた、旧注によって、その意味をさぐってみたい。

○言、理に合わざること或（あ）るも、未だ即ち斥くべからず。ただ反して之を難じ、自ら之を求めしむれば、理に契（あ）ふの應、怡然として自出するを謂ふ。（謂言者或不合於理、未可即斥、但反而難之、使自求之、則契理之應、怡然自出＝『鬼谷子』反應第二　陶弘景注）

ここでは、「反」することによって、「応」という現象があることをいう。他人の言に、なんらかの意味において疑点があるとき、つまり、その言葉がそれを発した人の心情と一致していないのではないかというような疑いなどがあるときであるが、そのようなとき、ただちにその言葉を斥け去るのではなく、「反」ということをするのであるという。そうすると、その「応」として、自然に相手の真実が現われ出ずるのであると、ここでは解されている。では、この「反」ということは、どのような成り立ちを持っているのであろうか。

○言に象あり、事に比あり、既に象比ありて以てその次を觀る。象はその事に象り、比はその辭に比（たぐ）ふなり。（言有象、事有比、既有象比、以觀其次、象者象其事、比者比其辭也＝『鬼谷子』　反應第二）

ここでは、いかなることが問題にされなければならないかということを、例によって旧注[5]によってみてみることにしたい。

○理に應じて既に出ず。故に能く象ありといふ。事に比ありとは、前事すでに象比あれば、更にまさにその次を觀て、自ら盡くすことを得しむべし。象とは法象を謂ひ、比とは比例を謂ふ。（應理既出、故能言有象、事有比、前事既有象比、更當觀其次、令得自盡、象謂法象、比謂比例）

「法象」、「比例」ということが、ここで提起されているのであると旧注ではいう。『鬼谷子』の「言に象あり、事に比あり。……比はその辞に比ふなり。」という本文からすれば、「言」について「法象」といい、「辞」について「比例」ということをいっているのだということがわかる。問題は、相手とする人間の真実ある「辞」を引き出すことである。相手の真実に迫る「辞」を引き出すことによって、その人間を自分に同調させ、ひいては自分の「力」とすることが目的であるのである。ところで、この「象」と「比」との関係について、ここに引いた『鬼谷子』の本文にたちかえってみてみると、「（言に象あり、事に比あり。）既に象比ありて、其の次を観る。象はその事に象（かたど）り、比はその辞に比（たぐ）ふなり。」といっている。「言」はいうまでもなく、「言葉」のことであるが、「比」にかかわってくるところの「事」とは、何であろうか。それは「物事」のことであるが、一般的な「物事」のことをふまえつつ、なお特殊な

一面をも持っているのである。

ここで我々は、必要あって、もう一度、この章の冒頭に引いた文章にたちかえってみることにする。それによると、「反して往を観、覆して今を験し、反して古を知り、覆して今を知り、反して彼を知り、覆して己を知り、動静虚実の理、来今に合わざれば、古に反して之を求む。」とあった。ここでは、古今往来の時間の経過と、自他の区別を超越したところに生ずるところの、物事の類型的な側面をとらえるべきことを、主張しているのである。そのようにしてとらえられた物事と物事との類似性を、ここでは「比」といっているのであると見たい。言葉は、物事を「象」、つまりかたどっている。このことはまた、そのかたどるべき形に、「法（のっと）っている」ことでもある。こうしたことから、先にみてきたように、陶弘景は「法象」ということばで、これらのことをいいかえたのである。しかも、この「法象」のもととなったところの「物事」には、相互に類似点、つまり「比」があるのである。物事の個別性を超えた一般性が、個別的なことをとらえる上からも大切であるというのである。

『鬼谷子』の本文では、「反して往を視、覆して今を験し云々」といっていた。ここでいう「反」と「覆」とは、いわゆる互文の関係にあると見てよい。したがって、それぞれ、ここでは「反覆」することをいうのである。「反覆」することによって、一度だけのことでは得られにくい真実を得ることを、ここではいっているのであり、しかも、存在や現象の「象」と「比」とを手がかりにすることによって、その「反覆」がより実りあるものになるというわけである。このことの具体的な状況について、「鬼谷子」では以下のごとくいう。

○象は其の事に象（かたど）り、比は其の辭に比（たぐ）ふなり。無形を以て有聲に求む。其れ語を釣り事に合ひて人の實を得る。其れ罝網を張りて獸を取るや、多くは其の會に張りて之を司（うかが）ふ。道、其の事に合えば、彼、自ら之を出だす。これ人を釣るの網なり。常に其の網を持して之を驅るに、其の言、比なければ、乃ち之がために變じ、象を以て之を動かして以てその心を報じ、その情を見、隨って之を牧す。（象者象其事、比者比其辭也、以無形求有聲、其釣語合事得人實也、其張罝網而取獸也、多張其會而司之、道合其事、彼自出之、此釣人之網也、常持其網驅之、其言無比、乃爲之變、以象動之、以報其心、見其情、隨而牧之＝『鬼谷子』　反應第二）

「反覆」ということが効果あることとして成立しうるのは、「象」と「比」とのおかげであると、ここではいっている。「反覆」して、例えば人の言葉を検討し、その人の真情を探ることは、「象」の網を張りめぐらすことに等しい。そうすると、その網の目の大きさに比例して、「比」としての相手の「情」、つまり真実の姿が、かかってくるという。このことを、『鬼谷子』ではまた、以下のようにもいう。

○己れ反して往き、彼れ覆して來る。言に象比あればなり。因りて基を定むるなり。（己反往、彼覆來、言有象比、因而定基＝『鬼谷子』　反應第二）

このことについて、旧注[6]では、つぎのようにいう。

○己れ反して往き、以て彼を求む。彼、必らず覆し來りて職に就く。則ち奇策必らず申（の）ぶ。故に言に象比あれば、則ち口に擇言なし。故に以て邦家の基を定むべきなり。（己反往、以求

彼、彼必覆來而就職、則奇策必申、故言有象比、則口無擇言、故可以定邦家之基矣）

なお、ここにいう「擇言」とは、『尚書』呂刑に、「擇言、身に在ること有るなし」といい、孔伝に「擇ぶべきの言、其の身に在ることなしという」、と述べるところによっている。これは、「正しいことばかりをいい、そのために、特に道に合ったことばだけを、その人のいうことから取り出すことができない。なぜなら、その人のいうことは凡て正しく、捨て去る部分が全然無いからである」と、一般に解されている。[7] 反覆ということが十分に行きとどき、「象比」がよくたどられるとき、それらの作用は甚大となる。ここに陶弘景が解しているように、国家の基礎が定まるほどの、大きなものとして実を結ぶことにもなると見られていたのである。

前述のごとく、「反覆」によって得られる大きな「力」は、この章の冒頭にのべたところの、「反」に対する「応」に外ならない。そのため、「反」は「象比」を媒介にして、「応」を得るのだと、この間の事情をふまえながら、いうことができるであろう。では、「反覆」や「象比」によって、どうして、前記のごとき「応」を得ることができるのであろうか。「応」そのものの本質をさぐるためにも、こうしたことを考えてみなければならない。

○情を開かんと欲するものは、象これに比して以て其の辭を牧すべし。同聲は相呼び、實理は同じく歸す。……反を以て覆を求め、其の託する所を觀る。故に此を用ふるものは、己は靜かならんことを欲す。以て其の辭を聽き、其の事を察し、萬物を論じ、雄雌を別つに、其の事に非ずと雖も、微を見、類を知ること、人を探りて其の内に居るが若し。（欲開情者、象可比之以牧其辭、同聲相呼、實理同歸、……以反求覆、觀其所託、故用此者、己欲乎靜、以聽其辭、察其事、論萬物、別雄雌、雖非其事、見微知類、若探人而居其内＝『鬼谷子』　反應第二）

「象これに比して、其の辭を牧すべし」、といい、「同声は相呼び、實理は同じく帰す」と述べている。「象比」ということに依拠し、それが「応」として「力」になるのは、結局のところ、ここにいうところの、同質のものの「相よび、同じく帰す」というところに、その作用の本質があるということができるであろう。個々のそのような作用の集合が、先にのべたように、国家をも動かすような「力」となるのである。

三　「揣」について

権力をそなえ、それを十分に発揮できることの条件の一つを、『鬼谷子』は、「量る」、又は「揣（はか）る」という。

○古の善く天下を用ふる者は、必ず天下の權を量り、諸侯の情を揣（はか）る。權を量ること審ならざれば、強弱輕重の稱を知らず、情を揣ること審ならざれば、隠匿變化の動靜を知らず。（古之善用天下者、必量天下之權、而揣諸侯之情、量權不審、不知強弱輕重之稱、揣情不審、不知隠匿變化之動靜＝『鬼谷子』揣篇第七）

「善く天下を用うる」、とのべられているように、古えの、強大な権力をふるったような人物には、「強弱軽重の称」を知る必要があり、

あわせて「隠匿変化の動静」に通じていることが要請されていたと、ここにいわれている。そのためには、「量る」ことと、「揣る」ことが欠くことができないとされているのである。

まず、ここでは「量る」ということについてみていきたい。

○何をか權を量ると謂ふ。曰く、大小を度り、衆寡を謀り、貨財の有無を稱り、人民の多少、饒乏、有餘不足、幾何なるかを料り、地形の險易孰れか利あり孰れか害ある、謀慮孰れか長じ、孰れか短なる、君臣の親疎孰れか賢り、孰れか否（しから）ざると、賓客の智睿孰れか少く、孰れか多きとを辨（わきま）へ、天時の禍福孰れか吉に、孰れか凶なる、諸侯の親孰れか用ひ、孰れか用ひざる、百姓の心の去就變化孰れか安く、孰れか危く、孰れか好み、孰れか憎む、反側孰れか便に、孰れか知なるを觀る。此の如きもの、これを量權と謂ふ。（何謂量權、曰度於大小、謀於衆寡、稱貨財之有無、料人民多少饒乏有餘不足幾何、辨地形之險易孰利、孰害、謀慮孰長、孰短、君臣之親疎孰賢、孰否、與賓客之智睿孰少、孰多、觀天時之禍福孰吉、孰凶、諸侯之親、孰用、孰不用、百姓之心去就變化、孰安、孰危、孰好、孰憎、反側孰便、孰知、如此者、是謂量權＝『鬼谷子』　揣篇第七）

ここでいう「量る」ということは、その対象として「権」があげられている。そのため、具体的にすることは、右の引用文にいうように、国々の領土の大小を度（はか）り、人口の衆寡を謀（はか）り、財政状態を称（はか）り、人民の生活状態を料（はか）る。また、地形、国防計画、君臣のむすびつきの程度、賓客の質等々を弁別する。さらに、天災があるかどうか、諸侯との関係、人民の服従の程度などを十分に観測する。これらを綜合して「量権」といっている。広く、相手方の権力に関するものを量りかつ知るのだということがわかる。

つぎに、「揣る」の方に移りたい。これはその対象として「情」があげられている。「情を揣（はか）る」のである。その具体的な内容について見ていきたい。

○情を揣るとは、必ず其の甚だ喜ぶの時を以て、往きてその欲を極むれば、其の欲するあるや、其の情を隠す能はず。必ず其の甚だ惧るるの時を以て、往きてその惡（を）を極むれば、其の惡あるや、其の情を隠す能はず。情欲は必ずその變を知る。感動すれども而もその變を知らざれば、乃ち且（しばら）くその人を錯いて與に語ることなかれ、而して更に親しむ所に問ひて、其の安んずる所を知る。夫れ情、内に變ずれば、形、外に見（あら）はる。故に常に必ずその見（あら）はれたるを以て、その隠れたるを知る。これいはゆる深きを測り、情を揣るなり。（揣情者、必以其甚喜之時、往而極其欲也、其有欲也、不能隠其情、必以其甚惧之時、往而極其惡也、其有惡也、不能隠其情、情欲必知其變、感動而不知其變者、乃且錯其人勿與語、而更問所親、知其所安、夫情變於内者、形見於外、故常必以其見者而知其隠者、此所謂測深揣情＝『鬼谷子』　揣篇第七）

ここで明らかにされているように、「情」とは、人間の感情のことである。それを知るには、対象となるその人間が、非常に喜んでいる時と、極端に惧れているときがよい。そうすれば、隠れることなく、本当のその人の感情があらわれ出て、それを知ることができる。

このような、非常に喜んでいるときや惧れている時のことを、『鬼谷子』では、「変」と呼んでいる。そうして、「人間の感情が心の内で変じたとき、形が外にあらわれる。だから、常々外に現れたところから、ふだんは心の内に深く隠されている感情をつかまなければならない」と、いう。こうしたことをふまえて、『鬼谷子』は以下のごとく説きすすめる。

○故に國事を計るものは、當に審に權を量るべし。人主に説くには當に審に情を揣るべし。情欲を謀慮すること必ず此に出づれば、乃ち貴ぶべく、乃ち賤むべく、乃ち輕んずべく、乃ち重んずべく、乃ち利すべく、乃ち害すべく、乃ち成すべく、乃ち敗るべし。その數は一なり。故に先王の道、聖智の謀ありといへども、揣情に非ざれば、隠匿は、これを索むる所なし。謀の本なり。説の法なり。（故計國事者、則當審量權、説人主、則當審揣情、謀慮情欲、必出於此、乃可貴、乃可賤、乃可輕、乃可重、乃可利、乃可害、乃可成、乃可敗、其數一也、故雖有先王之道、聖智之謀、非揣情、隠匿無所索之、謀之本也、而説之法也＝『鬼谷子』　揣篇第七）

国を相手として動かすには、前述のように「権」を量らねばならなかった。では、人を動かすにはどうするか。例えば、ここでは人主を動かすことについて述べている。それは、外にあらわれた、その心の内の「変」に対応する「形」をとらえ、それによって心の奥深くに隠された真情をさぐるのである。こうすることによって、人主を、ひいては国を動かす、大きな力を手に入れることができるのである。これらは、いずれも直接に対象を動かすのではなく、介在する現象をとらえて、それを支点として、あるいは手がかりとして、対象を間接的に動かすこととして、一般化していうことができるであろう。

右のような、「量る」ないしは「揣る」ことによって、それが大きな「力」となる理由を、『鬼谷子』の説くところにそいながら、もうすこしさぐってみたい。こうしたことに関連して、さらに『鬼谷子』の書では、「摩」ということをいう。

○摩は揣の術なり。内符は揣の主なり。之を用ふるに道あり。その道は必らず隠る。微に之を摩するにその欲する所を以てし、測りて之を探れば、内符必らず應ず。その應ずるや、必ず之を爲すあり。故に微にして之を去る。これを竅を塞ぎ端を匿し、貌を隠し情を逃（のが）れて、人知らずと謂ふ。故に其事を成して患なし。之を摩するは此に在り、之に符するは彼に在り。從って之に應ずれば、事、可ならざるはなし。（摩者揣之術也、内符者揣之主也、用之有道、其道必隠、微摩之以其所欲、測而探之、内符必應、其應也必有爲之、故微而去之、是謂塞竅匿端、隠貌逃情而人不知、故成其事而無患、摩之在此、符之在彼、從而應之、事無不可＝『鬼谷子』　摩篇第八）

前述の「揣（はか）る」ことが、有効でかつ「力」づよく行われるための手だて、つまり「術」を、ここでは「摩」といいかえている。それにつづけて、右の引用文では「内符は揣の主なり」と述べている。これはどういう意味であろうか。例によって、旧注[8]により、その解をさぐってみたい。

○内符とは、情欲内に動いて符験外に見はるるを謂ふ。揣は外符

を見て内情を知る。故に曰く、符を揣の主となす、と。（内符者、謂情欲動於内、而符驗見於外、揣者、見外符而知内情、故曰符爲揣之主也）

心の内で情欲が変動することがあれば、その符、つまり、しるしとして外にあらわれるものがある。したがって、「揣る」ことの主たる手段として、内心の動きと対応して外にあらわれたこのしるし、つまり「符」に注目することが大切である。このことを、「内符は揣の主なり」ということばで、いっているのである。そうして、『鬼谷子』のいうところでは、内と符との対応を保証するために、ある手段があるという。それを、ここでは「摩す」ということばであらわしている。その「摩」の仕方の要領として、「其の道は必らず隠る。微かに之を摩するなり」という。また、「微かにして之を去る」ともいいあらわしている。その「微にして隠なる」さまを、『鬼谷子』には、以下のように記している。

○古の善く摩するものは、鉤を操りて深淵に臨み、餌して之を投ずれば必ず魚を得るが如し。故に曰く、主事日に成りて人知らず、主兵日に勝ちて人畏れず、と。聖人は之を陰に謀る。故に神と曰ふ。之を陽に成す。故に明と曰ふ。いはゆる主事日に成るとは、徳を積むなり。而して民これに安んじて其の利するゆゑんを知らず、善を積むなり。而して民これを道として、其の然るゆゑんを知らず。而して天下これを神明に比す。主兵日に勝つとは、常に爭はず費さざるに戰って、民服するゆゑんを知らず、畏るるゆゑんを知らず。而して天下これを神明に比す。（古之善摩者、如操鉤而臨深淵、餌而投之、必得魚焉、故曰、主事日成而人不知、主兵日勝而人不畏也、聖人謀之於陰、故曰神、成之於陽、故曰明、所謂主事日成者、積德也、而民安之、不知其所以利、積善也、而民道之、不知其所以然、而天下比之神明也、主兵日勝者、常戰於不爭不費、而民不知所以服、不知所以畏、而天下比之神明＝『鬼谷子』　摩篇第八）

「摩」ということを、「微にして隠」に行うのであるという。そうして、その陰（ひそか）さをとらえて、「神」といい、それにのっとって事を行った、いわば陽的な行為の力の大きさをとらえて、「明」という。したがって、この術を、神明のことと、一般には見なしているのである。では、その「術」の具体的な方法は、いかなるものとして述べられているのであろうか。

○其の摩するは、平を以てするあり、正を以てするあり、喜を以てするあり、怒を以てするあり、名を以てするあり、行ひを以てするあり、廉を以てするあり、信を以てするあり、利を以てするあり、卑を以てするあり。平は靜なり、正は直なり、喜は悅なり、怒は動なり、名は發なり、行は成なり、廉は潔なり、信は明なり、利は求なり、卑は諂なり。故に聖の獨り用ふる所のものなり。衆人皆これあれども、然も功を成すなきは、其の之を用ふること非なればなり。（其摩者、有以平、有以正、有以喜、有以怒、有以名、有以行、有以廉、有以信、有以利、有以卑、平者靜也、正者直也、喜者悅也、怒者動也、名者發也、行者成也、廉者潔也、信者明也、利者求也、卑者諂也、故聖所獨用者、衆人皆有之、然無成功者、其用之非也＝『鬼谷子』　摩篇第八）

ここには「摩」の方法が非常に具体的にのべられている。しかし、これは聖人以外にはみだりに用いることはできないものであるという。では聖人のみが独り用いることが可能とされるその理由は、どこにあるのであろうか。

○夫れ事の成れるは、必らず數に合へばなり。故に曰く、道數は、時と相偶するものなりと。說の聽かるるは、必らず情に合へばなり。故に曰く、情合ふものは聽かると。故に物は類に歸す。薪を抱いて火に趨けば、燥けるもの先に燃え、平地に水を注げば、濕めるもの先に湮（しづ）む。此れ物類相應ずれば、勢に於て、譬へば猶ほ是のごときなり。此れ内符の外摩に應ずるや是の如きを言ふ。故に曰く、之を摩するに其の類を以てすれば、焉んぞ相應ぜざるものあらんや。乃ち之を摩するに、其の欲を以てすれば、焉んぞ聽かざるものあらんや。故に獨行の道と曰ふと。夫れ幾者は晩からず、成りて抱かず、久しくして化成す。

（夫事成必合於數、故曰道數與時相偶者也、說者聽必合於情、故曰、情合者聽、故物歸類、抱薪趨火、燥者先燃、平地注水、濕者先湮、此物類相應、於勢、譬猶是也、此言内符之應外摩也如是、故曰、摩之以其類、焉有不相應者、乃摩之以其欲、焉有不聽者、故曰獨行之道、夫幾者不晩、成而不抱、久而化成＝『鬼谷子』　摩篇第八）

ここでは、聖人のする「摩」のみが有効の極に至りうる理由を、それが「数」に合うからであるという。そうして、それに関連して、「道数は時と相偶うものなり」とも述べている。ここで「数」というのは、術数のことであり[9]、具体的には「揣の術」ともいいかえることができ、それはまた「摩」そのものでもあるのである。こうしたことを綜合してみると、「道」と「術」と「時」との三者がそろっているのが、聖人のみの「摩」が成功するゆえんであるということになる。聖人のこのような「摩」のことを、ここに『鬼谷子』から引いた文章では、「独行の道」といっている。しかし、聖人の「摩」が、このように「道」・「術」・「時」の三者が揃っているとして高く評価されるのは、結局のところ、それらが右の引用文にも述べられているように、「物は類に帰す」ということに深くかかわっているからである。右の引用文では、「物類相応すれば、勢において、たとえばなおかくのごときなり。此れ内符の外摩に応ずるや是の如きを言う。故に曰く、之を摩するに其類を以てすれば、焉んぞ相応ぜざるものあらんや。乃ち之を摩するにその欲を以てすれば、焉んぞ聴かざるものあらんや」と、いう。この「物類」を「相応」じさせることを最も有効に、時と場合とに応じて行うことを知っていたのが、ここにいう聖人である。聖人が国を動かし、人を使うのに、大きな「力」をふるった秘密は、ここにあったのである。しかも、聖人という人格が、自己と同類のものを他人の心情のうちに、種々の手段や術を使って見出し、それらを、「物類相応ずる」というかたちで、「力」として作用させ、利用したのだということも、見のがしてはならない。

四　気と聖人の「力」

『鬼谷子』の書においては、「道[10]」ということを重視する。そうし

て、その「道」は、「神明」の源泉であると、『鬼谷子』ではいう。「神明」とは、すでに前章でみてきたように、聖人のみに限定された、「摩」などを道じて発揮される、すぐれた能力であった。こうした「道」と「神明」とについて、『鬼谷子』では以下のごとくいう。

○神を盛んにするには五龍に法る。神を盛んにするには、中に五気あり、神、これが長たり。心これが舍たり。徳、これが人たり。神を養ふの所はこれを道に歸す。道は天地の始めにして、一は其の紀なり。物の造らるる所、天の生ぜらるる所にして、無形の化氣を包容し、天地に先だって成り、その形を見ることなく、その名を知るなし。之を神靈と謂ふ。故に道は神明の源にして、一はその化端なり。(盛神法五龍、盛神中有五氣、神爲之長、心爲之舍、德爲之人、養神之所歸諸道、道者天地之始、一其紀也、物之所造、天之所生、包容無形化氣、先天地而成、莫見其形、莫知其名、謂之神靈、故道者神明之源、一其化端‖『鬼谷子』　本經陰符七篇)

右の引用文において、「道は天地の始めにして、……物の造らるる所、天の生ぜらるる所にして、無形の化気を包容し、天地に先だちて成る」という。したがって、「無形の化気」の集合体を、万物の生ずる所としているのである。そうして、そのような「無形の化気」のなかから、聖人の行為、または作物としての「神明」も生まれてくるのである。また、右の引用文は、「神を盛んにするには、五龍に法る」という。これは旧注[11]では、以下のように解されている。

○五龍とは五行の龍なり。龍は則ち變化窮り無し。神は則ち陰陽測らず。故に神を盛んにするの道は、五龍に法るなり。(五龍、五行之龍也、龍則變化無窮、神則陰陽不測、故盛神之道、法五龍也)

これによると、「神」は、陰陽どちらかの気に限定されるものではない。また、陰陽両気に由来しながらも、しかもその次元をこえる。そのことを強調するために、陰陽からあるいみで発展したともとれる「五行」の、しかも、そこから生じた万物のなかの長としての龍を、その模範とする。[12] さらに『鬼谷子』の右の本文では、つづいて「神を盛んにするには、五気これあり」という。この五気については、陶弘景は、五気は五臓の気のことであると述べている。[13] 五臓つまり心・肺・脾・肝・腎の、人体の中にある重要な五つの器官を司る気があり、「神」は、これらの気に支えられており、身体の中心である、「心」に、「神」は宿るのであるという。これらのことを綜合して考えてみると、「神」の、諸々の「気」への因縁は非常に深いのだといってよいと思われる。したがって、聖人の「神」について、『鬼谷子』では以下のごとく論をすすめる。

○是を以て、五氣を養ふを得るときは、心よく一を得、乃ち其の術あり。術は心氣の道の由りて舍する所のもの、神乃ち之が使たり。(是以得養五氣、心能得一、乃有其術、術者心氣之道所由舍者、神乃爲之使‖『鬼谷子』　本經陰符七篇)

したがって、「気」を養うときには、心がよく「一」、つまり「道」にのっとって、天地万物の生成の方向性にそうことになる。その方行性に従うことを、ここでは「術」と呼んでいる。聖人の心には、「術」が自然に生じ、宿るようになると、いう。そうして、その「術」の作用として、ある働きが生じてくる。それが「神」であると、『鬼

谷子』はのべている。こうした「神」を体得している人として、「真人」と「聖人」とがあるという。

○生まれながらにして之を天に受く、之を眞人と謂ふ。眞人は天と一となりて之を知るものなり。内脩錬して之を知る、之を聖人と謂ふ。（生受之天、謂之眞人、眞人者與天爲一、而知之者、内脩錬而知之、謂之聖人＝『鬼谷子』　本經陰符七篇）

このことについて、またつぎのようにもいう。

○その通ずるや五氣養ひを得、務めは神を舍すにあり。これを化と謂ふ。化に五氣なるものあり。志なり、思なり、神なり、德なり。神はその一長なり。靜和なれば氣を養ひ、氣を養へば其の和を得、四者は衰へず、四邊、威勢あり、爲さざるなく、存して之を舍す。是を神化、身に歸すと謂ひ、これを眞人と謂ふ。眞人とは天に同じうして道に合し、一を執りて萬類を養彦し、天心を懷き、德養を施し、無爲にして志慮思意を包（か）ねて、威勢を行ふものなり。士は之に道達すれば、神さかんにして乃ち能く志を養ふ。（其通也、五氣得養、務在舍神、此之謂化、化有五氣者、志也、思也、神也、德也、神其一長也、靜和者養氣、養氣得其和、四者不衰、四邊威勢、無不爲、存而舍之、是謂神化歸於身、謂之眞人、眞人者、同天而合道、執一而養彦萬類、懷天心、施德養、無爲以包志慮思意而行威勢者也、士者道達之、神盛乃能養志＝『鬼谷子』　本經陰符七篇）

真人の境地に、普通の人間も、五気を養い、「志」・「思」・「神」・「德」が十分にそなわれば、到達できるのであると、右の引用文ではいっている。

「神」が生まれながらにして心に宿るのが真人であり、修業によってそのことを成しとげえたのが、前述のごとく、聖人であった。その具体的な方法を『鬼谷子』はここに、これまで述べてきたのであるが、これを仮に第一とし以下に更に他の方法を列挙する。その第二は、「志を養ふ」事という。

○志を養ふには靈龜に法る。志を養ふは、心氣の思ひ達せざればなり。欲する所あれば、志存して之を思ふ。志は欲の使いなり。欲多ければ心散し、心散すれば志衰へ、志衰ふれば思達せず。故に心氣一なれば、欲おほからず。欲おほからざれば志意おとろへず。志意おとろへざれば思理達す。理達すれば和通じ、和通ずれば亂氣、胸中を煩はさず。故に内は以て氣を養ひ、外は以て人を知る。志を養へば心通ず。人を知れば分職明らかなり。將に之を人に用ひんとほっすれば、必らず先ずその志を養ふを知り、人氣の盛衰を知りて、その氣志を養ひ、その安んずる所を察して以てその能くする所を知る。志養はざれば、心氣固からず。心氣固からざれば、思慮達せず。思慮達せざれば、志意みのらず。志意みのらざれば、應對猛ならず。應對猛ならざれば、志を失して心氣むなし。志うしなわれて心氣むなしければ、其の神を喪す。神喪すれば髣髴たり。髣髴たれば參會一ならず。志を養ふの始務は、己を安んずるに在り。己安ければ志意みのりて堅し。志意みのりて堅ければ、威勢分れずして神明なり。常に固く守れば、乃ちよくこれを分つ。（養志法靈龜、養志者心氣之思不達也、有所欲、志存而思之、志者欲之使也、欲多則心散、心散則志衰、志衰則思不達也、故心氣一則欲不偟、欲不偟

則志意不衰、志意不衰則思理達矣、理達則和通、和通則亂氣不煩於胸中、故内以養氣、外以知人、養志則心通矣、知人則分職明矣、將欲用之於人、必先知其養志、知人氣盛衰、而養其氣志、察其所安、以知其所能、志不養、心氣不固、心氣不固、則思慮不達、思慮不達、則志意不實、志意不實、則應對不猛、應對不猛、則失志而心氣虛、志失而心氣虛、則喪其神矣、神喪則髣髴、髣髴則參會不一、養志之始務、在安己、己安則志意實堅、志意實堅則威勢不分神明、常固守、乃能分之＝『鬼谷子』　本經陰符七篇）

ここでは、亀卜によって正しい判断を得ることを、「志」を養うことの基本的な方法とする。正しい判断力をそなえることによって、乱気が心中から除かれる。そうなると、人を正しく知り、正当に遇することが可能となる。こうした正しい判断力のおかげで、充実した、また、そこから生じた威勢ある、安定した心の働きを所有することができるようになる。その結果、大きな支配力を発揮することがおこりうる。こうした心の働き、あるいは力を、「神」という。心が、ここに至るには、心中の「気」が整い、正される必要があったことを忘れてはならない。

聖人となる第三の方法は、「意を実にする」ことであるとして、それを以下のごとく提起する。

○意を實にするには螣蛇に法る。意を實にするは氣の慮なり。心は安靜ならんことを欲し、慮は深遠ならんことを欲す。心安靜なれば神明さかえ、慮深遠なれば計謀成る。神明榮なれば、志みだれるべからず。……無爲にして、五臟を安靜にし、六腑を和通するを求め、精神魂魄、固く守りて動かざれば、乃ち能く内に視、反りて聽き、志を定め、之が太虛を思ひ、神の往來を待つ。（實意法螣蛇、實意者氣之慮也、心欲安靜、慮欲深遠、心安靜則神明榮、慮深遠、則計謀成、神明榮則志不可亂、……無爲而求安靜五臟和通六腑、精神魂魄固守不動、乃能内視反聽定志、思之太虛、待神往來＝『鬼谷子』　本經陰符七篇）

螣蛇、つまり龍蛇の類は、よく委曲屈伸する。[14] 身体が柔軟であるからである。右に引用した文章では、柔軟な判断をすれば、心中の「気」が安定し、配慮が万事に対してすみずみまで行きとおると、いっている。とらわれの無い、「気」の安定した、すみきった心、あるいは又、それは深遠な心といいかえてもよい。そうした心には、右の引用文にも述べるように、「神が往来する」という。こうした「気」の安定した心の持主には、以下のようなものが、見えてくるのであると、『鬼谷子』ではいっている。

○以て天地の開闔を觀、萬物の造化する所を知り、陰陽の終始を見、人事の政理をきわめ、戸を出でずして天下を知り、牖を窺はずして天道を見、見ずして命じ、行かずして至る。これを道知以て神明に通じ、無方に應じて神宿ると謂ふ。（以觀天地開闔、知萬物所造化、見陰陽之終始、原人事之政理、不出戸而知天下、不窺牖而見天道、不見而命、不行而至、是謂道知以通神明、應於無方、而神宿矣＝『鬼谷子』　本經陰符七篇）

ここでは陰陽の「気」の終始を、見きわめる力を得ることができるというが、これこそが、心に宿る「神」に由来する「力」でもあるのである。

聖人になるための第四の方法を、「威を分かつ」ことであるとして、以下のごとくのべる。

○威を分かつには伏熊に法る。威を分かつは、神の覆なり。故に志意を静固にして、神、その舎に歸すれば、威盛んなり。（分威法伏熊、分威者神之覆也、故静固志意、神歸其舎、則威盛矣＝『鬼谷子』　本經陰符七篇）

「威を分かつには伏熊に法る」ということについて、陶弘景は、以下のように注解を加えている。

○近きを發(う)って、遠きを震はす。之を分と謂ふ。熊の搏撃するや、必ず先ず伏して後に動く。故に威を分かつには、伏熊に法るなり。（發近震遠謂之分、熊之搏撃、必先伏而後動、故分威法伏熊）

大きな力を、広大な地域にまで及ぼすには、その前に、精神をしずめ、十分に精力を養わなければならない。しかるのち、大事にとりかかるべきであることは、熊が突撃の前に身を伏すのと同じであるという。このように、「志意を静固」にすることができると、そこに「神」がやどるというのである。

聖人になるための第五の方法は、「勢を散ずる」ことであるという。

○勢を散ずるには鷙鳥に法る。勢を散ずるは神の使なり。之を用ふるは、必ず間に循って動く。威肅に内盛んにして、間を推して之を行へば、勢散ず。夫れ勢を散ずるは、心虚にして、志溢るればなり。意、威勢を失し精神專ならざれば、其の言、外にして變多し。故に其の志意を觀て度數を爲し、乃ち揣説を以て事を圖り、圓方を盡くし、短長を齊ふ。無ければ勢を散ぜず。勢を散ずるは間を待って動き、動けば勢分かる。故に善く間を思うものは、必ず内、五氣に精しく、外、虚實を視、動いて分散の實を失はず。動けばその志意に隨ひ、その計謀を知る。勢は利害の決、權變の威なり。勢敗るるは神を以て肅察せざればなり。（散勢法鷙鳥、散勢者神之使也、用之必循間而動、威肅内盛、推間而行之、則勢散、夫散勢者心虚志溢、意失威勢、精神不專、其言外而多變、故觀其志意、爲度數、乃以揣説圖事、盡圓方齊短長、無則不散勢、散勢者、待間而動、動勢分矣、故善思間者、心内精五氣、外視虚實、動而不失分散之實、動則隨其志意、知其計謀、勢者利害之決、權變之威、勢敗者不以神肅察也＝『鬼谷子』　本經陰符七篇）

人間の勢いは、心のうちの「神」により発揮されるものであるという。その「勢」が十分に力を持つためには、猛鳥がその羽根で小鳥を撃ちおとす時、羽根が開ききっているように、「勢」をよく分散させて事にあたらなければならない。このように、「勢」が分散するには、右の引用文に「内、五気に精しく、外、虚実を視る」といっているように、「気」への完全な理解と、その作用の応用が誤りなく、対象に向けて成されなければならないのである。「気」の動きを、完全にとらえることができたとき、「勢」が十分に分散するための条件の一つがそなわるのであると、いいかえてもよいであろう。

聖人になるための第六の方法として、「転円」ということをいう。

○轉圓は猛獣に法る。轉圓は無窮の計なり。無窮は必らず聖人の心ありて不測の智をきはめ、不測の智を以てして心術に通ず。而して神道混沌として一たり。以て萬類を變論し、義を説くこ

と窮りなし。智略計謀、各々形容あり。或は圓或は方、或は陰或は陽、或は吉或は凶、事類同じからず。故に聖人は此の用を懐き、轉圓して其の合を求む。故に造化を興するものは始めを爲し、動作、大道を包ねざるなくして神明の域を觀る。天地極まりなく、人事極まりなく、各々以てその類を成す。その計謀を見れば、必らずその吉凶成敗の終る所を知る。（轉圓法猛獸、轉圓者無窮之計、無窮者必有聖人之心、以原不測之智、以不測之智而通心術、而神道混沌爲一、以變論萬類、說義無窮、智略計謀、各有形容、或圓或方、或陰或陽、或吉或凶、事類不同、故聖人懷此之用、轉圓而求其合、故興造化者爲始、動作無不包大道、以觀神明之域、天地無極、人事無窮、各以成其類、見其計謀、必知其吉凶成敗之所終也＝『鬼谷子』　本經陰符七篇）

「転円」は、円が転ずるように、世の中の万物の変転に応じて、心を働かせることをいう。ここにもいうように、その模範となるのは、猛獸の俊敏な動きである。こうした状態になるために、右の引用文には、「智略計謀、各々形容あり。或は円、或は方、或は陰、或は陽、或は吉、或は凶、事類同じからず。故に聖人は此の用をいだき、転円して其の合を求む」という。さきに「万類」といっていたところの、すべての存在に対して大きな力をふるうには、右の引用文にもいうように、陰陽の気の法則そのものである、転円の運動に合致しなければならない。これはことばをかえれば、行為が、道の運動の類型に同一化するということであるともいえるであろう。そうしてこそ、大きな力を発揮するのであるといっている。

聖人になるための、第七の方法として損兌（そんたい）ということをいう。

○損兌は靈蓍に法る。操兌は幾危の決なり。事に適然あり、物に成敗あり。幾危の動、察せざるべからず。故に聖人は無爲を以て有德を待ち、言、辭を察し、事に合す。兌は之を知るなり。損は之を行ふなり。之を損し之を說く、物に不可なるものあれば、聖人辭を爲さず。故に智者は言を以て人の言を失はず。故に辭煩はしからずして心慮らず、志亂れずして意邪ならず。其の難易に當りて、而る後に之が謀を爲し、自然の道以て實となす。（損兌法靈蓍、損兌者、幾危之決也、事有適然、物有成敗、幾危之動、不可不察、故聖人以無爲待有德、言察辭合於事、兌者知之也、損者行之也、損之說之、物有不可者、聖人不爲辭也、故智者不以言失人之言、故辭不煩而心不慮、志不亂而意不邪、當其難易而後爲之謀、自然之道以爲實＝『鬼谷子』　本經陰符七篇）

靈蓍というのは、蓍、つまり「めどき」に宿る霊力のことをいうのである。そうした蓍の霊力に依拠して、物事の成敗を知ろうとするのが易占にほかならない。ここでは、その易による占いにより、目に見えない、「幾危の動き」の世界のことを知るべきであるという。そうして、それに則って行為することを主張する。これは、易占によって類型化された陰陽の気の動きに、同化することをのべているのである。一方ではまた、自己の、耳目などによる狭い見解にたよる判断に害されることを避けなければならないという。そのために、自己の見解をはなれ、有德の人の言の中から選んで、そのよき言葉にしたがうべきであるともいう。自己をはなれて、易占

や他人の徳言に則ることが、ここにいうように「自然の道」に合することになり、それによって心が「実」あるものとなり、「力」となるのであると、述べているのである。

以上、七種の工夫によって、「士」が「聖人」となることができるという、『鬼谷子』の主張をたどってきた。それらは、いずれもその心中の「気」の充実と保全につとめ、あるいは心を「気」の運動に合致させることによって、「自然の道」の持つ力を、自己の内にとり入れることであったと見てよい。例を多く、動物や鳥にとっていたのも、そのいみで唐突なことではないということがわかるであろう。

おわりに

「天下分散し、上に明主なく、公侯に道徳なければ、小人讒賊し、賢人用ひられず、聖人竄匿し、貧利詐偽のものおこり、君臣相惑わし、土崩瓦解して相伐射し、父子離散して乖乱目す」[15]というのが、『鬼谷子』の所説の背景となっている社会の現実であった。このような事態をふまえて、士人に決起をうながした、一種の檄文ともみなされるのが、『鬼谷子』の書であったといってよい。

『鬼谷子』は、士に、聖人となれと激励する。そうして、「聖人萌牙巇罅[16]を見れば、之を抵つに法を以てす。治むべければ、抵ってこれを塞ぎ、治むべからざれば、抵ってこれを得(う)。或は抵つこと彼の如く、或は抵って之を反し、或は抵って之を覆す」[17]といい、聖人にこのような、大きな影響力と権力とを保障する。では、聖人のそうした「力」は、どのようにして、存在しうるのであろうか。

『鬼谷子』の書では、聖人の権力の根源を、心の充実に求める。その充実した心から発する「力」で、対象の不正常な状態を、正常に返そうとする。その根拠となるのは、天地の陰陽の気の動向に注目し、その正常な気の動きに同化し、それによって天地自然の力を自らの内にとり入れ、自らの「力」とするところにある。そうした、自らのうちにとり入れた「力」を、『鬼谷子』の書では「神」ともいう。このような「神」の力により、存在や現象の不正常さを、正すのである。こうしたことが成り立つのは、「同声は相呼び、同理は帰す」（「反応」第二）と、「物類、相応ずる」（「摩篇」第八）などのことばに明らかなように、原理となっている考えに、気の感応説があり、気が作用しあうという立場があるからである。この間の事情を、「天地の合離終始により、必ず巇隙あり、察せざるべからず。之を察するに捭闔を以てし、能くこの道を用うるは聖人のみなり。聖人は天地の使なり。世に抵つべきなければ、深く隠れて時を待ち、時に抵つべきあれば之が謀を爲し、上に合うべく、下を検すべく、能く因り能く循い、天地のために神を守る[18]」といっている。なお、ここに、「之を察するに捭闔を以てす」といっているところには、特別の注目がはらわれなければならない。

『鬼谷子』には、ほかにもいろいろな側面もあるが、これまで見てきたように、その根底にある発想の形式からして、そこには陰陽家など「気」の思想家たちの影響が、他の何にもまして強いのであるということがわかるであろう。

注

①陶弘景による。盡陰則無内、盡陽則無外。

②「陰陽」は、古い用例では、例えば『詩経』大雅「公劉」に、「既に景（はか）り迺ち岡にす。其の陰陽を相（み）、其の流泉を観る」とあり、ここの陰陽は、一般の、陰は山の北、陽は山の南」という立場にたって解釈されている。このように、陰と陽は、古くから相反するものと考えられており、それを基本にして意義、用法が後世に進展していったものと考えられる。

③「一陰一陽これを道という」＝『易』繫辞(上)。こうしたことをふまえて、繫辞(下)では、「易は窮まれば変ず。変ずれば通ず」という。

④以静観動、則所見審、因言観辭、則所得明。

⑤陶弘景。

⑥陶弘景。

⑦堯時、典獄之官、皆能敬其職事、忌其過失、無有可釋之言、在於其身＝孔穎達『尚書注疏』。

⑧陶弘景。

⑨夫謀成必先考合於術數＝陶弘景。

⑩ここで説かれる「道」は、基本的には『老子』の第一章と趣旨を同じくしている。

⑪陶弘景。

⑫龍、鱗蟲之長、能幽能明、能細能巨、能短能長、春分而発天、秋分而潛淵……。＝『説文解字』第十一篇(下)。

⑬五氣、五臟之氣也。

⑭意、委曲、蛇能屈伸、故實意、法籐蛇也＝陶弘景。

⑮天下分散、上無明主、公侯無道、則小人讒賊、賢人不用、聖人竄匿、貨利詐偽者作、君臣相惑、土崩瓦解而相伐射、父子離散、乖亂反目＝『鬼谷子』　抵巇第四。

⑯萌牙（ぼうが）＝乱政のおこるきざし。
巇罅（きか）＝国政の破綻。

⑰聖人見萌芽巇罅、則抵之以法、世可以治、則抵而塞之、不可治、則抵而得之、惑抵如彼、或抵反之、或抵覆之＝『鬼谷子』　抵巇第四。なお、抵は抵抗、つまり手むかい、あたること。

⑱自天地之合離終始、必有巇隙、不可不察也、察之以捭闔、能用此道聖人也、聖人者天地之使也、世無可抵、則深隱而待時、時有可抵則爲之謀可以上合、可以檢下、能因能循、爲天地守神＝『鬼谷子』　抵巇第四。

付記　小稿では、『鬼谷子』の注釈は、全面的に、梁の陶弘景のものに依拠した。『鬼谷子』の本文と陶弘景の注とは、今、上海古籍出版社の「諸子百家叢書」の続選の一冊として、一九九〇年に出版された『鬻子・公孫龍子・鬼谷子・子華子』によって、流通している。